

向井正也先生

退官記念集録

昭和58年9月

向井正也先生退官記念事業会

## 目 次

向井正也先生の御退官を迎えて……………	1
記念行事の記録……………	2
建築から環境へ……………	8
一向井正也先生退官記念講演—	
向井正也先生の御経歴……………	30
業績目録……………	32

## 向井正也先生の御退官を迎えて

向井正也先生は、昭和57年4月1日をもって神戸大学教授を定年御退官になり、神戸大学名誉教授とされました。

先生は、昭和20年京都帝国大学工学部建築学科を御卒業以来、御経歴に見られますような幾つかの教職を歴任され、昭和38年神戸大学工学部助教授として御赴任になり、神戸大学とともに19年間にわたり研究と教育に専念されてきました。この間、建築学の発展と多くの学生、後進の指導教育に多大な功績をおさめられました。また、学内においては環境計画学科の創設を含む建築学科の発展に御尽力された他、学会をはじめ建築批評などでの御活躍を通じ、社会的にも大いなる貢献をされました。

先生の御退官にあたり、知友、卒業生あいばかり、このような先生の多年の御功績をたたえ、感謝の意を表わすため、一昨 year 秋「向井正也先生退官記念事業会」が設けられました。この趣意に対して、卒業生及び関係各位からは非常に多くの御賛同と御協力が寄せられ、お陰様で記念事業は極めて順調に進められました。記念事業として、昨年5月8日(土)には記念講演会、記念祝賀会が多数の参加者を得て非常に盛会のうちに開催されました。記念旅行は8月26日から5日間、21人の参加者を得て向井先生御夫妻と共に、大韓民国南部に建築見学旅行を行いました。この他、遅れておりました記念出版もこの6月にようやく出版の運びとなりました。

そしてこのたび、先生の御経歴、主な業績目録、記念講演会の記録等を収めた記念集録を作成して、この記念事業に御協力下さいました各位に贈呈いたすことになりました。

先生は、御退官後も至極御壮健で、訥庵と名づけられた離れにて、研究と趣味に悠々自適の日々を過ごされております。今後も御健康に留意され、ますます建築界のために御活躍されることを御期待申し上げます。

最後に、記念事業に御協力賜りました各位に対し、深甚なる謝意を表しますと共に、格別の御尽力を頂きました事業会発起人の方々、木南会ならびに神戸大学建築系教室関係者に心から謝意を表する次第です。

昭和58年9月

向井正也先生退官記念事業会  
実 行 委 員 会

## 記念行事の記録

向井正也先生の多年の御功績をたたえ、感謝の意を表わすため、一昨年秋の発足以来、活動を進めてまいりました向井正也先生退官記念事業会は、昭和57年5月8日(土)の祝賀行事、同年8月26日から5日間の記念旅行、本年6月出版の運びとなりました記念出版など、当初予定された記念事業も一応完了いたしました。

### ● 記念講演会の開催

5月8日(土)・午後2時から会場の工学部大講義室に、来賓、一般、卒業生をはじめ、学内の教室教職員、学生を含め260人余の出席を得て行われました。

まず最初に山田稔教授より向井先生の御略歴と御功績の紹介があった後、神戸大学での最後の教壇に立たれた向井先生は、「建築から環境へ」の題目で約1時間半の講演を行われました。

(内容は本集録に掲載)

### ● 記念祝賀会の開催

記念講演会と同日の夕刻5時30分より三宮オリエンタルホテル大宴会場において記念祝賀会が開催されましたが、来賓、一般、神戸大学関係、木南会関係合わせて約180人が出席し、会場は各界からの多彩な顔ぶれで賑いました。

まず、山田稔教授による向井先生の研究業績、御功績等の紹介のあと、事業会の経過が報告されました。引き続き、寺谷木南会会長より記念品及び目録の贈呈が行われましたが、記念品は先生の御希望でポータブルビデオセットが選ばれ、募金の残金は先生の記念出版援助、記念旅行、及び金一封として送られました。続いて、松本隆一工学部長、相川浩日本建築学会近畿支部長から祝辞をいただいた後、向井先生のユーモアあふれる御挨拶で式を終え、引き続き祝宴に入りました。

祝宴は野地脩左神戸大学名誉教授の発声による乾杯で幕をあげ、なごやかな歓談のうちに宴は進みました。この間、お忙しい中をかけつけられました堯天義久神戸大学学長をはじめ、知友、卒業生の方々からテーブルスピーチがあり、先生のこれまでの御功績や人柄、思い出等が楽しく語られました。

最後に、向井先生の一層の御発展と御健勝を祈って全員で万才三唱をし、満場の拍手の中、向井先生御夫妻が退場され、8時頃全員散会しました。

### ● 記念旅行

記念旅行は卒業生、教室教職員など21名の参加者があり、向井先生御夫妻と共に大韓民国南部の古寺、民家、工業団地などを訪れました。前半は折からの台風の接近で悪天候でしたが、後半には天気も回復し、楽しい記念旅行になりました。

旅行は昭和57年8月26日、大阪空港から釜山へ渡り、通度寺を見学後、慶州へ向いました。27日は慶州の仏国寺、掛陵、民家、国立慶州博物館などを雨中にもかかわらず熱心に見学しました。28日は前日とうってかわり晴天に恵まれ、念願の石窟庵を見学し、大邱へと向い、海印寺を見学、市内に宿泊しました。29日は昌寧工業団地、馬山自由貿易地域などを視察しながら釜山へもどり、市内見学をしました。この日の夜は特別に民俗舞踊を觀賞しながらの宴会となり、向井先生御夫妻を囲み、旅の話題や思い出話等に時の経つのを忘れました。

韓国料理のあまりの辛さに、お腹の具合を悪くする人も出ましたが、30日昼には全員無事大阪空港に到着しました。

#### ●記念出版の援助

向井先生の学位論文「近代主義の建築論的研究」を補筆改訂、写真を加え、題名も「モダニズムの建築」と改められました。昭和58年6月、ようやく出版の運びとなり、京都のナカニシヤ出版から一般市販されています。醸金していただいた方全員にお届けしなければならないところですが、予算の都合上、どうしても人数を限定せざるを得ませんでしたことをお詫び申し上げます。



記念出版著書「モダニズムの建築」  
A5版、334ページ、ナカニシヤ出版

向井正也先生退官記念講演記録  
昭和57年5月8日

## 建 築 か ら 環 境 へ

向井でございます。私はこういう席で講演するなどというような事は考えもつかなかったのですが、とうとうやらなければならないハメになりまして、ほんとうに弱っているのです。私は、だいたい喋るのがとてもヘタでして、なぜ先生なんかになったのかと、いつも悔んできたのですが、それもとうとうこれで最後だと思ひまして……(場内笑い)

ところで、このように図表を沢山つくりましたのは、喋るのがヘタなことを少しでもカバーしようと思ったからです。今は大体テレビ世代が多いですから、もっとも、みなさんテレビ世代ではないとは思いますが、ヴィジュアルに、半分は目で理解していただけたらと思います。ともかく口で喋るのがヘタな分は何とかこれで辛抱していただきたいと思います。

そこで私の研究と申しましてもね、ちょうど私の前にお辞めになりました鳥田先生なんか非常にお話もお上手ですし、研究も私と同じような建築論(あるいは建築意匠)をやっておられますが、その内容は私の研究なんかと実際は全然違うのです。私のやっていることは、一概に建築論とはいっても何かこう、自分で申しますのもおかしいですが、実のところこんなことをやっている人は殆どいないのです。それで、何時だったか、建築家の磯崎新さんが、こういうことをやっているのは、あなたぐらいしかいないと、まあ、稀少価値があるといってほめてくれたことがあります。でも、われながらその中味はそうたいしたことはないと思うのですが。

京大の森田慶一先生は、いわゆる京都学派というわが国でも非常にすぐれた建築論の研究グループを作って来られましたが、そのなかには、非常にすぐれた研究者がたくさんおられます。鳥田先生なども無論その一人ですが、私など京都学派のなかでは全く異端なんですね。異端といふのか、全然別のものになってしまって、文字通り不肖の弟子なんです。

もともと私には森田先生のような難しい研究はできませんので、非常に尊敬はしているのですが、京都学派の人達のやっておられるような「論」には大へん弱いのです。だから「歴史」と「意匠」とをつきまぜたような、私は自分でそれはそれなりにいいとは思っているのですが、なんと申しますか、現代史的なもの、いい方を変えますと建築の同時代史ですね、そういうも

のをやっていきたいとかねがね思ってきたわけです。それと、あまり意味のない、といったら悪いですが、まあ平たくいったら、実際に役に立たないような「建築論」より、何か役に立つようなもの、吉田松陰ではありませんが、「実学」というようなものをしていきたいと思ひまして、ずっとそうした線で今日までやって参ったわけです。それで、この何かの役に立つという、これは非常に大方のヒンシュクを買うかもしれませんが……。そういう意味からも近代建築、なかでも一番近いところのモダニズムを研究の対象として参りました。

私が当初研究していました頃に近代主義という言葉で呼ばれていましたものは、近頃ではよくモダニズムと呼ばれていますが、どういうものか、そのモダニズムが近年になって、再び注目されるようになってきたように思われます。面白いものですねえ、物事は時代とともにどんどん変わりますので……。この間も、どこで読みましたか、住宅作家として有名な、篠原一男さんなども、これからはまたモダニズムでやるのだというようなことをいっておられます。少々おかしいことだと思うのですが。まあ建築の状況一般が、そんなことになってきているのですから、モダニズムのことをお話しするのも、あながち意味のないことではないと思います。

ところが、御存知のようにそのモダニズムは、一部で何と申しますか、告発というか、批判というか、非常にひどい仕打ちをうけてきているのですが、このこと自体私はおかしいと思っているのです。が、ともかく近頃そうした告発の側は一般にポスト・モダンという言葉でよばれていまして、どこへ行ってもポスト・モダン、ポスト・モダンといった調子です。この言葉はチャールズ・ジェンクスというイギリスの建築評論家の著書の名前からきているものです。もっともポスト・モダンという言葉そのものは、もっと以前からもあったのですが、ジェンクスがこの本で、じゃかじゃかとジャーナリスティックに騒ぎたてましたので、それが流行になって、反対派の人でも何もかも含めて、みんなポスト・モダンという言葉を使うようになりました。

私もだから、使ったら便利がいいから使っているわけですし、そういう意味で一種の符号のようなものだと考えております。このように最近ではポスト・モダンの大はやりですが、一体、ポスト・モダンはモダンとどう違うのかという問題、あるいはポスト・モダンは近代主義をほんとうに乗り越えたかどうか、などという問題が残されているのです。それも私にいわせると、本当にそれほど大きく乗り越えたとは到底思えないのですが。このことは、誰かがいってましたけれども、孫悟空がお釈迦さんの手のひらの中で、ずいぶん遠い宇宙の涯まで行っているつもりで、実際はどこまでもお釈迦さまの手のひらのなかでしか動けなかったという喩えのように、結局は、そんなところのように思われますねえ。

例えば御存知ル・コルビュジェという大建築家がありますが、ポスト・モダニズムにしましても、要するにコルビュジェの描いた建築の創作活動の軌跡のなかで動きまわっていたにすぎないといった、結局は今でもそのような程度でしかないんじゃないかと私は思うのです。まあ、これは非常にいろいろ解釈があるとは思いますが、そういうことで私は現時点でモダンという

ものを、あるいは、ポスト・モダンということをも含めて、もう少しよく理解していきたいと考えますので、今日はそういうことをお話ししようと思っております。

そこでまず、この講演のタイトルですけれど、えらく大層な看板をあげてしまいましたが、この「環境へ」というのはどういうことかと申しますと、これは結論を先にのべてしまうことになるのですが、建築学というものは、今までのような建築の扱い方、計画の問題、あるいは意匠の問題も含めてのことですが、これまでのような建築的なアプローチでは、これからはダメになるのではないかと思うのです。いいかえますと、ある意味では、建築という概念がそんなにいつまでも一所にじっとしているものではないと考えるわけです。

建築学というものは、かつて東大では「造家学」と呼びましたが、あのころは「家づくり」でもよかったと思いますが、後にはそれがちょっと分かりにくい「建築」になりましたように、これからはその「建築学」も、名前はそれでもいいとは思いますが、内容的には「環境」の方を向いているように思うのです。

本学でも「環境計画学科」というのが出来ましたが、まあ、今はそういう時代にさしかかっているのでしょうか。だから時代の指向性と申しますか、これから先をずっと見渡しましたところ、どうも環境の方を向いている。これをもう少しはっきり申しますと、これからは建築的なせまいものを見方をあらためる必要があるのではないかということです。そもそも建築家というものは、建築学者、研究者も含めての話ですが、ややもすると「建築の眼」でしかものを見ようとしない。あたかも一般の社会があって、その横に別に建築の社会があるかのように思っているようなところがあります。

そこで一般にものを見るにしましても、建築の世界ではこうだ、一般社会ではこうだというようなことになって、歴史ひとつとってみましても、建築史といえば建築プロパーの歴史だけでいいんじゃないか、などといったような考え方が、これまで主流を占めて来たのではないかと思います。ところが、ここに来ておられます野地先生以来、多淵さんも含めて神戸大学の建築史研究のやり方はそうではないのですね。ともかく私は、わが国の建築史学もこの辺でもう少し考え直してかからなければいけないのではないかと思うのです。

神戸大学では前々からそういう「考える史学」の方法論を提唱して来ておられます。その点私も大いに同調しているわけですが、小児病的に、せまく建築、建築といわずに、もっと大人になって、広い意味で、建築の枠のなかだけではなく、社会とか、経済とか、政治とか、いったもののコンテクストの中で考えて行かなければならないのではないかと思います。それが私のいわゆる「実学」に通ずるものなのです。

これをもう少しわかりやすく申しますと、広い意味の近代建築は、ルネサンスから現代に至る全過程を含むものですが、そのなかでの近代主義、モダニズムというのは、大体1920年代からの時代に含まれています(図1参照)。そこで私が研究して参りましたモダニズムも、こればかり

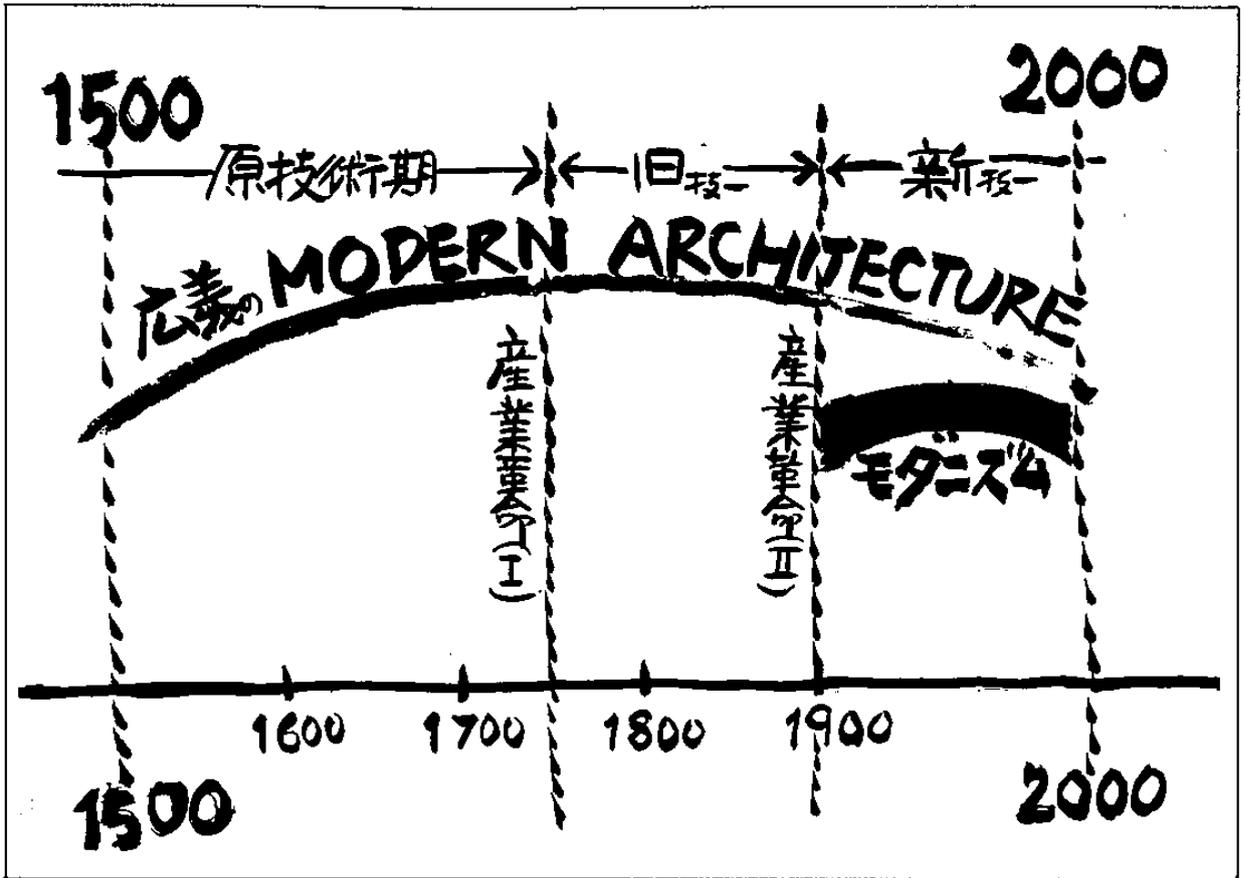


図 1

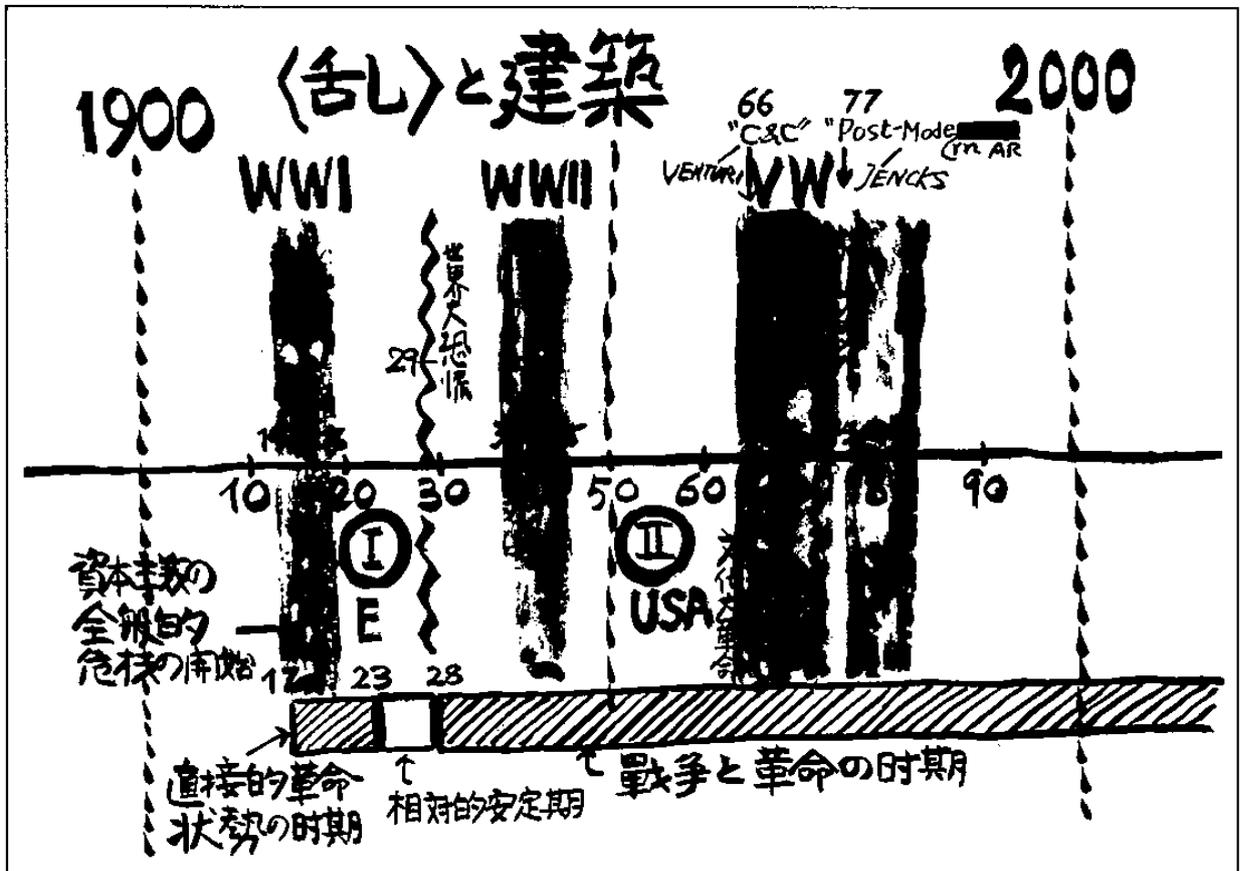


図 2

にかかずらってはいけないので、やはり広義の近代建築の全体の展望のなかで見なければならぬと思います。歴史と方法というものは、そういうものでして、私のやっておりますものは、現代史、あるいは同時代史ですが、現代史というものは、現代ばかり見てはよくないので、それとともに現代からルネサンスあるいはバロックに至る広い歴史的視野のなかで、近代を考察する必要があると思います。なぜかと申しますと、われわれのなかには常に伝統が生きていますから、現代には現代の非常に新しい面もある反面で、歴史全体を通じての一つの性格もある。そういうことで、近代主義として私が今のべておりますものは、時期的にみて大体1920年代から30年代の時期にわたるものと、これとは別に、50年代以降今日に至るもの（図2）との二つの時期が考えられます。この二つの時期のうち、最初の時期のモダニズムは、上にも述べましたように、今非常に強い批判にさらされており、モダニズムがもはやほとんど次の新しい段階に移行するのではないかとすら考えられます。

ところで、このモダニズムの方法として、典型的なのは、やはり御存知ル・コルビュジェです。彼が「建築へ」（あるいは「建築芸術へ」、「建築芸術をめざして」）という本を書いたのが、大体1920年代の初め頃でして、この本はヨーロッパ近代主義の初期の思想を代表するものであったと考えてよいと思われます。

これに対して、ポスト・モダニズムの新しい局面を代表する本として出て来たのが、これも皆さんよく御存知だと思いますが、アメリカの建築家ロバート・ヴェンチャーリの「コンプレキシィ・アンド・コンストラクション・イン・アーキテクチュア」（日本語訳では「建築における複合と対立」）という本です。アメリカにヴィンセント・スカーリという建築史家がありますが、彼は、この本を、上のコルビュジェの「建築へ」以来の最も重要な著作だといっています。「建築へ」の出版は1923年頃だったと思いますが、その後約半世紀の1966年になって、このヴェンチャーリの本が出たのです。

コルビュジェの「建築へ」は、いろいろの批判もありますが、ともかく初期のモダニズムを代表する、いかにもそれらしい書名だと思いますが、「複合と対立」は、いい方をかえましてコルの20年代での「建築へ」に対して「環境へ」という意味を含むものではないかと考えられます。勿論これには、それ以外の意味も多く含んでいますので、余程よく注意して読まないで見逃すかもしれませんが、ともかくこの本にはそういう重要な画期的な意味が含まれているということです。だからこれ以後、これだけの本はめったに見当たらないし、事実ほとんど出ていないのではないかと思います。

ということで、この「建築から環境へ」というテーマには、上のような意味を持たせることで、結局1920年代から70年代あたりを詮索しようと思いますので、在来のいわゆる建築論からはほど遠いかもしれませんが、大体この退官記念講演というものは、理屈ばかりをいうのではなく、自分が今まで何をしてきたかというようなことを喋るのが本筋だということのようですので、

私もここではあまり難しいことは述べずにいこうと思います。

私の近代主義の研究はもともと批判的な考察を主軸とするものです。大体、私はこの近代主義そのものに、それほど傾倒し、没入してやって来たわけではないのでして、つまり何時も醒めておりまして、冷たい目で眺めているわけです。だからモダニズムの初期の段階もそうだし、今日のいわゆるポスト・モダニズムを見るときもそうなのです。要するに近代主義の研究は、それに傾倒し没入して、何と申しますか、ミイラとりがミイラになるようなことになりかねませんので。もっとも私としましてはある意味では、モダニズムもポスト・モダニズムもその良さもある程度分ることは分るのですが……。

さっき山田教授から紹介していただきましたように、私は教職について今日でもはや30数年になります。その前半は、京大と京都美大とで、大体近代主義の研究をやっておりました。それを今度の退官の記念に一本にまとめて出版してやろうということだったのですが、間に合わなくて非常に残念です。その後神戸に参りまして、しばらくして、このポスト・モダンと呼ばれる新しい段階になって来るのは、さきにものべましたように60年代の後半になってからです。当時私はそのことに気づいて、これを「マニエリスムの状況」とよび、「新建築」に論文を書いたのを覚えております。

学会や研究室のゼミでもそのころからぼつぼつ、マニエリスムの研究を始めまして、いろんな本を皆さんと一緒に読んで参ったのですが、そうこうしているうちに、はからずも、私の周辺からも、何らかのポスト・モダン派が出て来ることになるわけです。

毛綱モン太君とか、渡辺豊和君などといった人たちがその先頭に立ってきましたが、これらの人たちは、おそらくそれほど私とは肌が合わなかったのではないかと思います。毛綱君なども、「あなたは私を軽蔑しているでしょう」などとしばしばいいましたが、まあ、軽蔑はしていなかったけれど、上にのべましたように、冷たい眼で見ていたことは事実です。しかし、そういうことで、なるべく、ミイラとりがミイラにならないようにと自分で自分にいい聞かせながらやって参ったわけです。

こうしてマニエリスムの研究は、その後今日まで何とか続いて来ておりまして、それをきちんとまとめなければならないのですが、できずじまいで、未だにまとまっておりません、というよりも、むしろ難しいからどうもうまくいかないのではないかなどと思い始めて来ているのですが、そういうわけでまだ中途半端な段階です。今回は、そうしたマニエリスムのことなんか、とてもお話しするところではないので、さしあたりまず、このモダニズムをどう扱えばいいか、どう考えればいいのか、といった風のことを、お話して見ようと思います。つまり今度、退官記念で出す本の、上っ面のところだけでもざっと御紹介したいと思います。

まず、近代建築、モダニズムはその発展の上で、いろいろな特性を持っていると思われます。そのことが、うっかりすると忘れられているかもしれないということがあるので、今まで何べ

人も述べて参りましたので、またかと思われる人があるかもしれませんが、モダニズムがその発展の上で大きな特徴があるということはどういうことかと申しますと、まず様式のこのような発展の例は今まで歴史の上では無かったということです。ヨーロッパにも、日本でも東洋でも無かったことですが、その特徴の一つは、発展の場が移っているということです。

これが非常に大事なことなんです。誰でも知ってのとおり、一つはヨーロッパ・ドイツを中心としておこったもので、この第一次の、いわばヨーロッパ・モダニズムは、これが今日もとても厳しく告発されているものですが、その後の発展の場がアメリカへ移っています。そして、このいずれの時期にも、それぞれクラシック・フェイズ（古典期）とでもいうか、非常に作品の完成度の高まりのある、すぐれた時期が存在します。それは、ヨーロッパの20年代と、アメリカの50年代とに分けて考えられると思います。ところで、私はこうした近代主義建築を戦前から考察しつつ参っているのですが、戦後になりますと、アメリカの強い影響の下で、50年代以降のモダニズムの第2段階しか研究の対象にしない場合がほとんどで、この二つの段階のうち20年代の研究の方がどうしてもお留守になります。私は、モダニズムをつかむためには、20年代を考えた上で50年代を考えるべきで、そのためにはこの二つの違いをはっきりさせておかなければならないと思います(図3 参照)。

そのちがいは、まず端的に申しまして、第一の方は運動ですね、アヴァンギャルドとか、非常に前衛的で、社会との繋がりを強く持った運動です。ところが、それがアメリカの風土に移植されますと、ここは何よりも商業主義の強いところですから、どうしてもかつての運動に含まれた精神とか思想というものがどこかへ行ってしまって、単なるスタイル、すなわち皆さん良く御存知の「国際様式」—インターナショナルスタイルという名前と呼ばれていますが、そうした様式扱いでコマーシャルリズムの上に乗って発展することになります。

ところで、ここで大切なことは、われわれは近代建築を歴史的に明らかにしなくてはならないこととして、これは京都大学の西山先生などともかなり意見が一致する、というよりは、むしろ私が西山先生の考え方の影響を強く受けたものかと思いますが、建築のある一つ概念というものは決して固定したものではなく、歴史的な概念として、何時どういう状況のもとでのもの考え方かということ的前提として考えないといけないと思うのです。

例えば、アメリカで今なお盛んに活躍している長老のフィリップ・ジョンソンという大建築家がありますが、彼は有名な建築歴史家、ヘンリ・ラッセル・ヒッチコックとともに、ニューヨークの近代美術館(MOMA)をバックにして、アメリカで最初のモダニズムの建築運動をはじめ、これによってアメリカ・モダニズムはその確立を見るわけですが、この時、彼はこの建築運動を、さっきも申しましたように、難しい理屈とか、社会的なコンテクストなどをヌキにして、もっぱらカタチの問題、美学の問題としてやって行った方がより有効であろうというようなことをいっております。ということは、アメリカの精神風土の特性はそういうものなので、

こうした次第で、彼らはモダニズムの建築を「国際様式」として様式呼ばわりすることからその運動を展開して行ったのです。

そこで、だまって聞いておりますとよく「近代建築というのは国際様式である」などと平気でいっている人がわが国でもいますが、戦後のアメリカで国際様式と呼ぶぶんにはかまわないですが、近代主義のヨーロッパでの確立期にまで遡って、これを国際様式と呼ぶのは、歴史を歪める、というよりは建築を歴史的に正しく把握していないということですね。そういうあやまりを、建築史家ですら、戦後の今ごろまでわが国でも一般に犯して来ていると思うのです。だから、この頃になって、ようやくそれではいけないというわけでしょうか、大体1975年頃になって、わが国でも一部の若い人たちの間で、いままで誰もやらなかった建築の同時代史、あるいは現代史関係の研究をやり始めたことが注目されます。

この同時代史というのは他の分野なら以前からやっているものですが、建築学の中には、日本建築史とか西洋建築史など、それぞれ専門分野があって、同時代史のようなものは学術的ではないというような考え方が未だに根づよく残っていると思われまます。そういうことではいけないと私は思うので、同時代史的な考え方でゆくと割合近い過去をも研究対象としますが、それはあくまでも現在の目で見えるわけです。ところが在来の建築史は、もっぱら過去を見るだけで現在にはね返ってはこないのです。過去の時代のなかに飛び込もうとするんですね。ただもう過去の歴史的事実というものだけを一生懸命に掘り下げて研究している。特に一般の日本建築史の方法はそうですね。過去の事実を見る場合にも、現在との対話があったらいいのですが、先程も申しましたように建築論の中でも歴史的な規定というものが重要なみをもつわけです。

まあ、話がちょっと横へそれましたが、そういうことで、同時代史的な見方というものはこれまでわが国ではほとんど無かったのが、ようやく近年になりまして一部の若い人達の手で推し進められようとしていることはよろこばしい事実です。まあ、在来の考え方からすればこうしたものは、学術的ではないとされるわけですが、東大の村松貞次郎さんなんかがやって来ておられる、なんというのですか、「日本の近代建築」の研究などもまた同時代史に他なりません。こうして、いまやわが建築史学にも新しい方法による研究が動き出して来ています。

もっとも村松さんたちの考え方は私などとはだいぶ違いますが、ともかくも、そういう線で歴史をやろうというのは非常にいいことだとは思いますが。ただその扱い方にはかなり問題があると思うのですけれども、わが国でも大体そういうことをやろうという時代に、おくれればせながらだんだん来て来ているといえるようです。

こういう方向は今までの建築論にもあまり見られませんでしたね。特に京都学派の建築論はどちらかというと、外からものを見ようとはしません、芸術社会学という、ものの見方も、あまり偏りすぎても困りますが、世の中の移り変りによる状況の変化と建築との関係というものも、やはり見てゆく必要があると思います。特にこういうことは、近代建築を考察する上で

不可欠なものだと私は考えるのです。

この近代主義—モダニズムというのはこの20世紀の乱世、図表では「乱」と書いておきましたが、激動の時代の芸術なんですね。社会的、経済的、そして政治的な意味でも(図2参照)。特にその発展のプロセスの上で政治的な意味が圧倒的で、その政治的な変動の背後には、もとより経済的な動因があると思います。例えば、1929年の世界大恐慌、これなど、モダニズムの発展の上で、決定的ともいえる大きな影響力をもつものです。これがやはり直接、政治的なものに結びついて、それが建築家や芸術家の行動に影響することもあるし、それがじかに、建築家のもの考え方やナイーブな神経、精神に大きな影響を及ぼすことが考えられます。

そういう風に見ますと、これはヨーロッパの歴史に、先例として前からよく見られるもので、私は前に「乱」を背景としたマニエリスムの状況というものに注目致しましたが、それはそのまま、現代と状況的に大変よく似ていると思われれます。つまり「乱」の時代というのは20世紀の現代もそうだったし、16世紀のイタリアもそうだったのです。そういう風に見ますと、これは広義の近代として一括出来る時期に併行的におこる類似現象として理解出来るものと考えます。だからモダニズムの場合にはマニエリスムの視角が特に重要だと思われれます。ここではとてもそこまで入る余地はありませんが、ともかくそういう意味合いで、この「乱」というものを見ますと、例えばこの表で示された二つの世界戦争(WWI、WWII)ですね、それからその後ではあの朝鮮戦争にベトナムの十年戦争、そのあと、まだまだいろんな局地戦争が無数におこっております。ついこのあいだもイギリスがアルゼンチンとフォークランド戦争をやっていますが、戦争と革命が絶え間ないですね、東南アジアの方も、中近東も……。マルクス主義的な眼からすれば、これは資本主義に特有の全般的危機と呼ばれますが(図2参照)、第一次世界戦争の前後はその「直接的な革命の状況—情勢の時期」とされ、その後にはしばらく「相対的安定期」がやって来るのですが、それ以後現在までを「戦争と革命の時期」としているのは、よく今日の状況をいい表わしていると思います。

こういう〈乱〉の時代の中で、モダニズムは不断に動揺を繰り返して来たわけですが、そうした中での短い安定期において、モダニズムはヨーロッパで最初の確立の時期を迎えます。それまでは生産が無かった第一次大戦後のドイツでは、表現派がはびこっていましたが、生産の再開とともに漸くこれに代ってモダニズムが活性化を見るわけで、その意味からも表現派は一応モダニズムとは区別して考えるべきだと思うのですが、その後、今度は1945年に第二次大戦が終って後しばらく、アメリカは非常な繁栄の時期を迎えます。アメリカは全世界をリードしているような感じで、その経済的な安定と繁栄のなかでモダニズムの建築もまた非常にすぐれた文化的な盛期、すなわち第二の確立期を迎えるわけですが、ところがその後が具合が悪いので、間もなくアメリカはベトナム戦争のドロ沼にのめりこみ、これが終わったのが1975年です、それ以後は今日に見られる文化的な衰退を迎えるわけですが、この意味からも、いわゆるポストモダ

ンなどという言葉が出てくるのも分かりますね。今日、もはやアメリカの繁栄の絶頂期<sup>ピーク</sup>は終わりました。その後の建築は、もうすべて違った状況下に入っているのです。その状況が非常に混沌として分かりにくい。ある人はこれを「閉塞」などという言葉で呼びますが、まあそんな身近なところまで先取りしたようないい方はやめませうけれども……。以上大別して二つのモダニズムの発展の大きな特徴は、段階的に二つの違ったもの、つまり同じ呼び名でありながらヨーロッパとアメリカという全く違った文化的性格を持つ二つの確立期をそれぞれ迎えたことだと思います。

これは芸術史としては全く異例のことで、普通ですと、様式のサイクルは一つの山を描くものなのですが。そうではなしに、何かこんな風に、モダニズムには二つのピークがあるわけで、まあこんな図ではおかしいかもしれませんが(図3参照)、これが一つの特徴ですね。それからもう一つ、これもよく問題になる、モダニズムでは一番大切な事だと思いますが、発展の当初の頃の「素朴な」—— 本当の意味では素朴では無かったかもしれませんが —— 状態に対して、「機能的・合理的」であったというようないい方をする人が今日よくいるということです。私は、それはおかしいと思うのです。例えば村松貞次郎さんなども、そういう風ないい方をよくされていますが、本当はそうではなかったのです。機能的、合理的で簡単に片付けてしまうのはおかしいわけです。モダニズムは発展の当初から、本当はそんなに純な、生一本なものではなかったのです。既にその頃から近代主義の建築は、平たくいってしまうと現在のそれと本質的にさほど大きなちがいのない、いわばマネリスムの状況下にあったと思われるのです。ということは、それは不斷に何らかの表現性を求めて来たということ、しかも、その表現もだんだんエスカレートするような、激化するような形で次第に表現の自由度をおしひろげるような方向で発展して来たのです。

だから、今日では、ものによっては、デザインの語彙のなかに非常に俗悪なものまでが入って来るわけですね。まあ、なかなか、そこまではやれない人も多いのですが、ともかくその手はじめとしてよく使われましたのは民俗的<sup>フォーク</sup>な表現です。もう今日ではあまりやらないようになりましたが、しばらくの間、ここ10年程前のことですが、デザイン・サーヴェイというのがよく行われましたね。デザイン・サーヴェイというのは、結局そういったフォーク的なものを求めてのデザインのねた<sup>ねた</sup>捜しみ<sup>み</sup>たいなものだったといえますね。こうしたヴァナキュラー(他領域言語)と呼ばれるものは、いい方を変えると、みんないわゆるアノニマスなものなんですね。このアノニマスとは無名的、或は無銘的、あるいは匿名的なもの<sup>の</sup>ことで、銘というのは銘のあるなし、または由緒のあるなしという意味も含まれますが、とにかく広くそうした無名性、匿名性を含めた意味でのアノニム、アノニマスというものは近代主義の全般に亘る大きな特性だと思われま<sup>す</sup>。すなわちモダニズムはその発展の全期間を通じて、何かの形でこのアノニマスなもの、あるいはヴァナキュラーと呼んでもいいものを基軸に持っています。このヴァナキュラーという

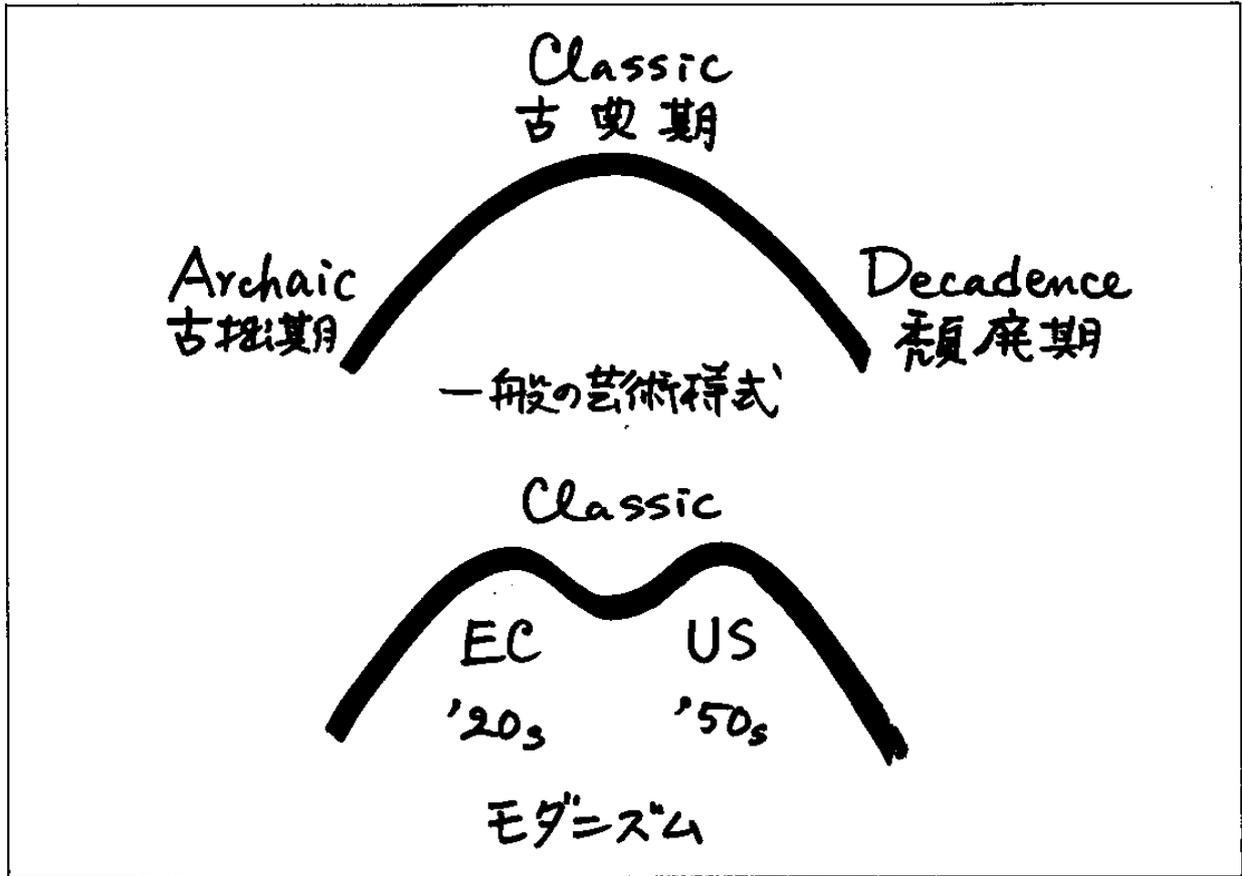


図 3

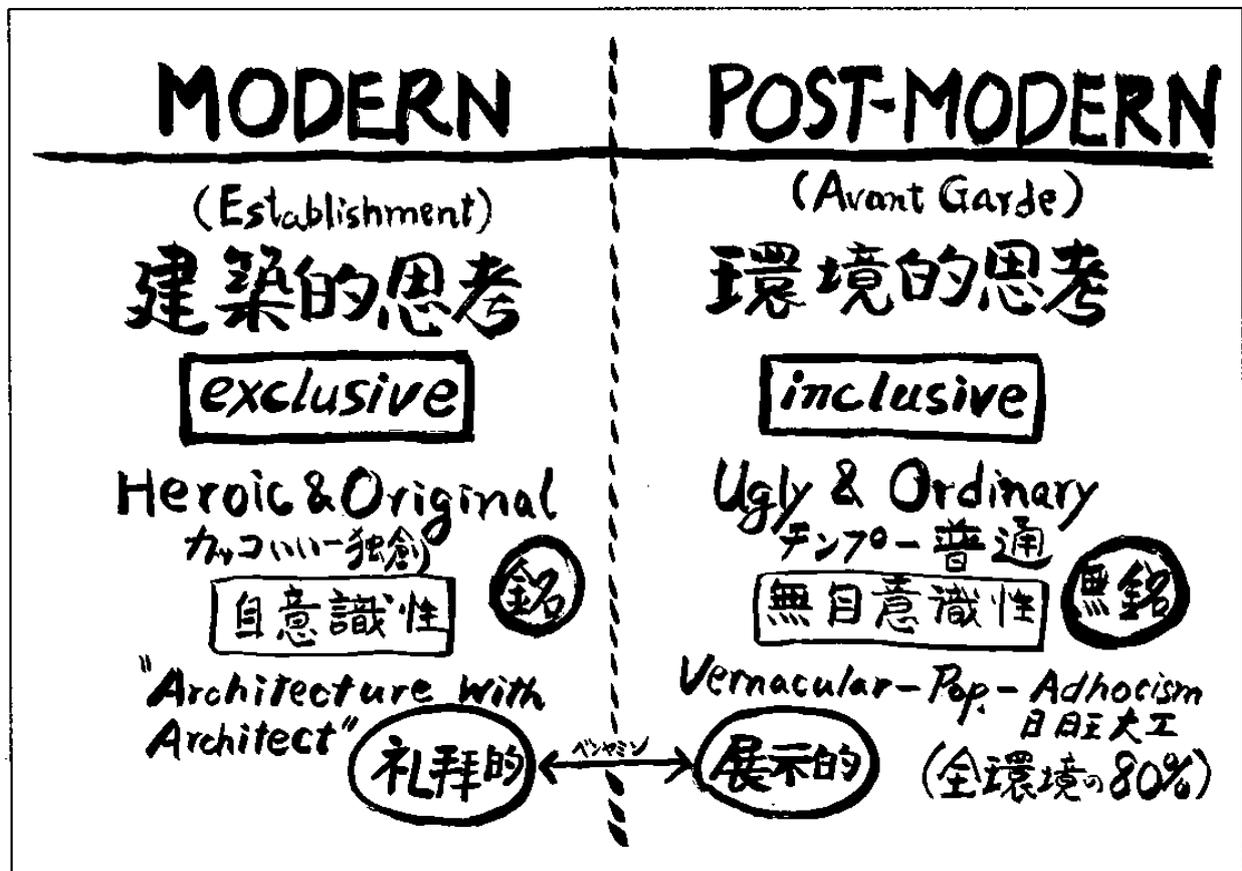


図 4

言葉のなかには過去の伝統的様式—ハイスタイルは含まれてないわけですね(図5下参照)。

ハイスタイル、すなわち過去の支配階級の使った名のある建築様式ではなしに、他の分野から来たアノニマスな伝統のなかでの造形言語、モダニズムはそういうものをもっとも強く求めたのですね。そこで、よくモダニズムが折衷主義を排除したといわれるのは、このハイスタイルの選択を否定しただけのことなので、その新しい選択の視野のなかにはこういうアノニマスなものが入っている。その方は決して否定しないで、どんどん使っているということですね。

現在ポストモダンの建築家達にしましても、彼らは自分の作品には非常に個性的なもの、個性的な表現を求めようとするのですが、その反面において、一見パラドクスだと思われる、それとは本来矛盾的であるアノニマスなものに対する関心が強いというのは大変興味深いことです。ポストモダン派はこの関心が強いだけでなしに、さらにそれを超えてですね、これに徹しようというような傾向も一部で出てくるわけです。それは、先に述べました環境芸術ではありませんが、環境芸術は彫刻の世界なんかで在来の創造的なもの、オリジナルなものを創造しようというような立場に対して、もっとありふれた普通のなんでもないものを造ろう、それも個性を出さずに、集団でものを造っていくというような立場に立っていますね。だから、アート・アンド・アーキテクチャーというような芸術的な方向とは反対に、先にも申しましたように、方向としては一般にアノニマスなものを造り出そうとする。それを意識の上だけにしても、はっきりしたかたちで打ち出しているのがアメリカの建築家ロバート・ヴェンチューリです。ヴェンチューリは図に示しましたように、自らの作品を陳腐なものと呼び、或はアグリー・アンド・オーデイナリーなものを提唱しています(図4参照)。これは先にのべました彼の著書、「建築における複合と対立」のすこし後になって出したあの「ラスベガスから学ぶ」という本のなかで書いているのです。

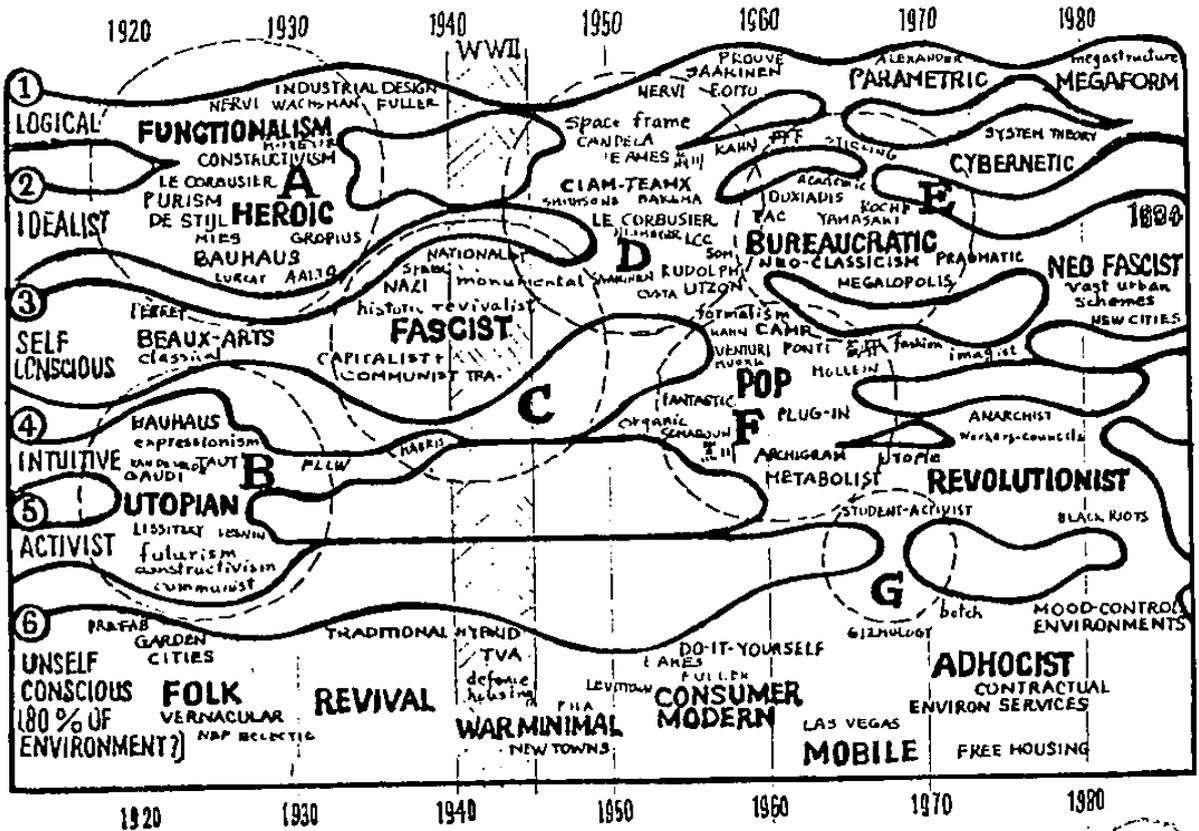
こうした考え方にはなかなかついていけない人が多いと思います。もちろんこれは、言葉通りに受けとっていいかどうかという問題もありますが、かっこのいいもの、これが今までのモダニズムの行き方でしたね(図4左参照)。この線はポストモダンの段階でもむろんあるわけです。ところが、それを超えてですね、上にのべたような傾向がだんだん出て来ているのです。こうなってくると建築家はもう自分の個性を全く放棄してしまったことになりますが、ヴェンチューリは、一方でそういうマニエリスム的な個性追求の線を打ち出しながら、一方でこういう醜悪で普通の建物を志向しようとしています。その線はもとより環境的なものに向うような姿勢、行き方につながるのではないかと思います。「ヴァナキュラーなもの」と先に申しましたが、これからは建築の概念も、在来のプロフェッショナルなものから変わってくるのではないかと思います。

イギリスの建築評論家チャールズ・ジェンクスは、1971年に有名なポストモダニズムに関する本を出すまでに、「21世紀の建築」という本を書いたのですが、この本のなかで、20年代か

ジェンクスの〈進化の木〉

近代建築の6つの伝統の系譜

Charles Jencks: ARCHITECTURE 2000 Predictions & Methods, 1971



ヴァナキュラリズムの系譜

THE DEVELOPMENT OF "DESIGNED" ("ISM") ARCHITECTURE

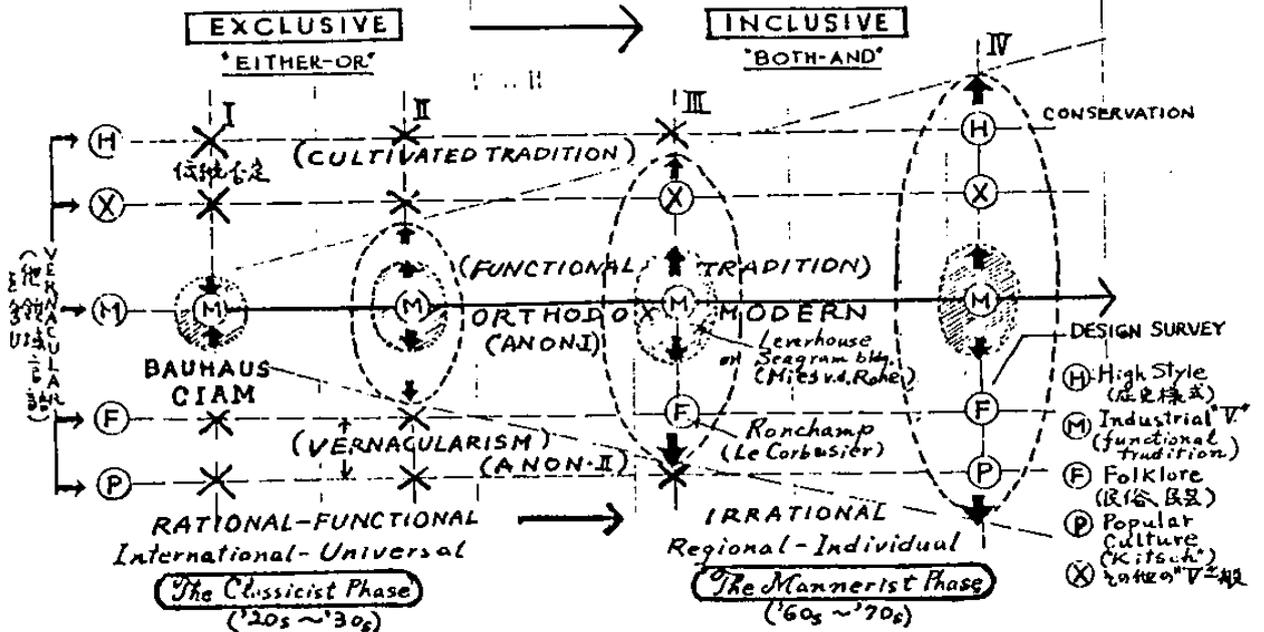


図 5

ら今日に至る近代建築の発展の全過程、つまり20世紀初頭のいわゆる確立期からポストモダンへの過程を六つの伝統としてとらえています。図5の上部を見て下さい。番号を打ったり、破線で囲んだりしたのは私が勝手に書き入れたものですが、まあある程度的事实を物語っていると思われまふ。こういう考え方がどういふものかと申しますと、この表の①から⑤までは一般に自意識的な建築のアプローチを示すものです。これまで建築家たちはこの自意識的なやり方でやって来たのですが、そうしたモダニズムの自意識的な伝統に対して自意識のないアノニマスでそこらあたりにいくらでもあるような建物、ヴェンチャーリはそれを、例えばレヴィット・タウンというようなものに注目しているのですが、いふなればポップ・アーキテクチャーの登場です。そこいらにいくらでもある建売住宅もまた建築だというわけではす。

結局ルドルフスキーの「建築家によらない建築」ですが、在来の方は「建築家による建築」です。「建築家によらない建築」も建築の範疇に入れるべきではないかという、それがやはり21世紀的な未来思考ではないかというのがジェンクスの提案です。この図表の一番下、⑥のところの広い流れが見られます。この無自意識的な — というのは環境の80%とありますように、人間の生活環境のなかの、まあ80%ほどの建築はこの無自意識的なアプローチに属していると見ています。それが未来の建築では、これらもすべて建築と見なされるわけなんです。ジェンクスは近代建築の六つの伝統と呼んでいますから、この一番下の流れも建築のなかに入れているわけではす。だから彼は、一方でかなり問題になることをいってはいますが、こうした点はなかなか、一つの見識をもっているのではないかと思ひます。

この図表の1970年のあたりで、この無自意識的な流れは、上の流れと一つにだけ合ってきているのが見られます。これは私が勝手に書いたのですが、「G」というところでくっついてあります。その下を見ますと、ラスヴェガスとあり、また右下のところにはアドホシストなどとあります。これはどういふことかと申しますと、専門家のつくる建築、つまり専門技術者、建築家のつくる建築ではなしに、日曜大工という言葉が表わす素人づくりのもの、ということではす。アドホシズムというの、これもジェンクスのつくった言葉ですが、なかなかいいことをいっているのです。これは、技術者のつくる建築などとはちがって、素人の手づくり、いわゆる“ドゥ・イット・ユアセルフ”なのですから、仕事の段取りがそうちゃんと整ってはいない、というよりは、それほど計画的でないわけではす。あり合わせのもので何とか、間に合わせで造って行くといったものです。これに対して、技術者のつくる建物は、ちゃんと計画して、ブループリントにして、それに見合った材料をちゃんと選んできて、それで造ります。こうしてジェンクスの提唱したアドホシズムとは行き当りばったりの、あり合わせでものを造って行こうという、それはまさに、先程も申した、いろんなものを寄せ集めてつくる無計画的なやり方のことではすから、全環境の80%の無自意識的建築に連らなるものです。これからはすべて建築扱いしようというわけではす。

今まで建築といえば、一般に立派な芸術作品をさすもので、ワルター・ベンヤミンのいわゆる「礼拝的」なものです。人が崇めて、博物館の中に祭るようなものです。ところがこういうものに対立するのが「展示的」なものでして、ベンヤミンも芸術作品はかつての礼拝的なものから、次第に展示的なものになってきている、とっています。ベンヤミンには「複製技術時代の芸術」という有名な論文がありますが、そこでこのベンヤミンの説によりますと、その眼目がこういうところにあると思われます。だからこうなってくると、これからの建築はこれまでとちがいそんなに崇めたてまつるものではなくて来ます。すなわちこれを保護して博物館に入れるとか、明治村へ持って行くとかいった風に、大切に保存しなくてもよいことになります。そもそも建築の永久保存などという考え方は、私なども虚妄だと思うのですが、ここでも又そんなやり方はもはや過去のものだというわけです。

これについては、先程ひきあいに出しました村松さんも、去年（1981年）の“新建築”12月号の臨時増刊「日本の建築家」のなかで、ちょっとおもしろいことをいっていますね、例によって例の如くで、私などなかなかついて行けませんが、ある点では私にとりましても、史観が違い立場が違うだけで分るところもあるのですが、ある人にこう質問されたというのです。あなたは保存運動をやっておられるけれど、現在建てられている建物は将来保存するようになると思いますかと。これには参った、私は絶句した、とっていますね。そしてそのことがずっと気になっているともいっていますが、その答えとしては、彼にいわせると、将来の建物は結局保存しないだろうということなのです。その点に限っては正しいことをいっていると私は思います。こんなものは保存に値するものではないということなんですね。そういう考え方が今日一般的であると思われます。

ただおかしいと思うのは、村松さんのこうした考え方があくまでモダニズムに対する誤解や偏見にもとづいているということです。それが、やっぱり私にはついていけないところでしてね。あの人は「モノ学」ということをよくいいますが、モダニズムは要するにモノにならないわけで、彼はこれを本物とは考えていないようなのです。ちょっと話が横に入りますけどね。要するに彼は、「合理的・機能的」と考えるモダニズムに反対の立場から、これからも保存に値するような手造りの本モノの建物を造ってほしいというわけなんです。そうはうまく行きませんわね。これでは歴史家の歴史知らずというものではないかと思ひます。もはやそういう時代ではなくなってきているのです。

ところでこの村松さんのモノ学というのはどういうものかと申しますと、建築評論家の長谷川堯さんなどもよくいっていることなんです、現代の建築は機械が造ったもの、あるいは工業が造ったもので、そういうものは保存できないということなのです。あんなものは困ると。まあそんなに極端にはいいませんけれどね。要するにこれからの建築にはなるべく手造りの要素も入れて欲しいということなんですね。そういう考え方も一面で理解出来なくもないのです

が……。いつまでもこんな大時代的な建築の概念を後生大事に抱えこんでいて、建築とはこんなものであると固定的に考えられてはかなわないですね。私は、ジェンクスと同様、21世紀に向かって上述の全環境がすべて建築であると考えても良い、否、考えるべきだと思いますね。保存にしたところで、もはや建築的思考でなく、環境的思考でのぞまねばと思います。環境文化、環境芸術という発想です。

京都市などの町並保存にしても一部のいわゆる「歴史的環境」なるものだけを対象にして他はほったらかしにしていますね。京大の西川幸治さんたちのやって来た保存修景にしても、祇園新橋など一部の名所だけに限られています。これではやはり環境的とはいえないですね。これはやはり古い芸術とか文化財などといった礼拝的な見方から来るものではないでしょうか。そういう考え方はやがて次第に無くなるのではないのでしょうか。今はともかくとしまして、21世紀には……。そんな先のことは予測できませんが、そういう風になる傾向があると私は思いますね。

この図の上の言葉はルイス・マンフォードが「技術と文明」の中でいっているものなのですが、近代建築がその発展の初期からの一般的傾向としてもっと考えられるものです(図6参照)。「ユニークで非反復的なもの」とは結局のところ芸術作品のすべてについてそうであるように、ベンヤミンのいう“アウラ”をもつものなのです。アウラとはそのものだけにしかないオリジナルな香気、香りですね。作品としての独自性—ユニークさがあるということです。こうしてマンフォードもいうように一般に近代芸術の方向はユニークで非反復的なものから逆に、<sup>ユニット</sup>単位と<sup>シリーズ</sup>系列へという、これすなわちアウラを消し去るような方向へ向っているように考えられます。これは先にもしばしば述べましたモダニズムの基本的傾向ですが、こういうものの理解が何より必要ですね。また繰り返しますが、今日の時点で、上で建築的思考と申しましたが、その線で、ユニークと非反復の美学にかかずらって建築ばかり見ていたら、「環境へ」と向う大きな時代の流れから取り残されてしまうことになります。やはり社会的な状況の変化をよく見極める必要があります。

これは私が前から申ししていましたことをマンフォードも指摘しているわけですが、一方この図の下を見て下さい。これはどちらもアメリカの建築家の論文のタイトルです。ジェイムズ・フィッチが1961年に論じた“エッセティック・オブ・プレンティ”これは「豊饒の美学」と訳せますね。「浪費は美德」という、よき時代のアメリカの使い捨ての美学で、ちょうどその頃日本は例のメタボリズムで騒いでいた高度成長期に当ります。ところが当今はですね、ロバート・スターンが1981年にものしたこの論文は、ちょうどフィッチのものから、わずか20年を経てこのようにエッセティック・オブ・ポヴァティー「貧乏の美学」とまではいわないにしても、ほとんどそれと同義だといえる、脱石油時代の省エネのケチケチ時代の美学という、価値基準のコペルニクス的転換といえますね。この「貧乏の美学」は、建築家がいくらあがいても長谷川さんがいくら息巻いても、こればかりはどうしようもないものです。もうこうなったらこうなつたで、

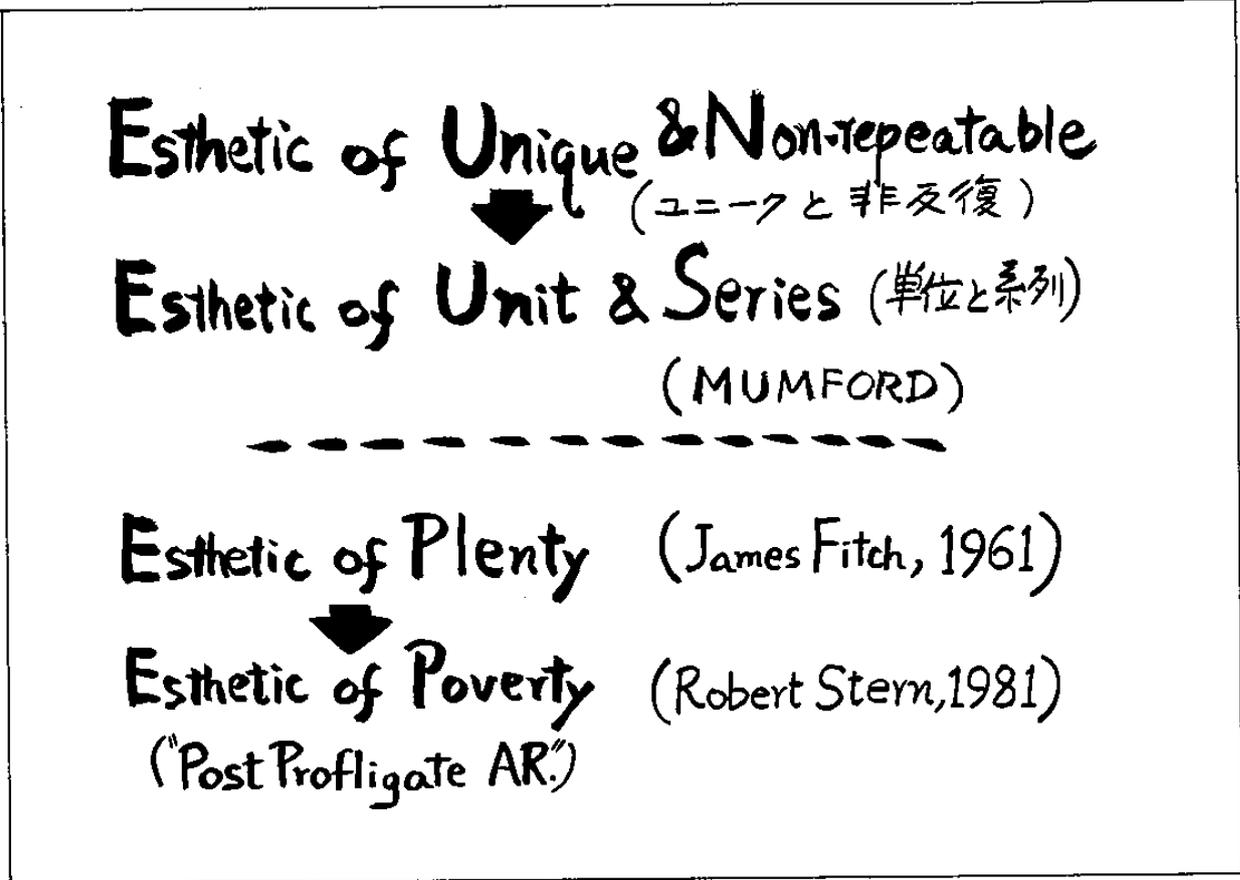


図 6

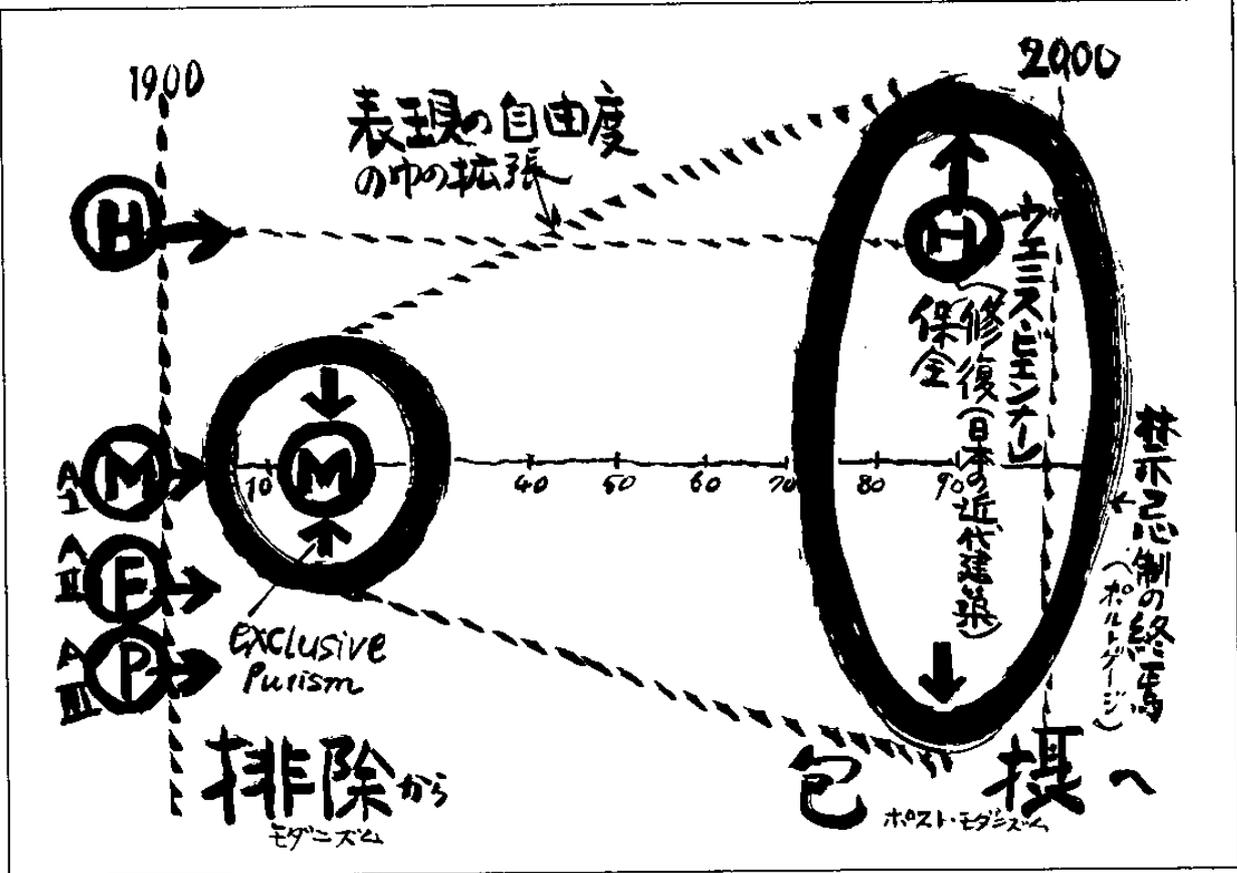


図 7

近代の歴史家も哲学者も美学者も掌を返したように早速転向するわけで、私はこうした事実を近代の建築理論の時代適合性と呼んでいます。

例えば黒川紀章さんなども、いつの間にかメタボリズムという浪費の美学を棚上げにして、近頃では宗旨がえの発言をしていますね。「共生」とか「共生の時代」とか。かつては純白ともいえるホワイト派だった彼ですが、いまでは盛んにグレー派的提言をするという驚くべき変身ぶりです。何かちょっとマニエリスムがかったようなことすらいつにないですね、また事実そういう風な考え方に変わって来ているように思われます。君子はどんどん豹変するわけです。でも豹変する方がまだしもましであって、いつまでも「千代に八千代に」式の永却不変の信念を貫くような頭の固さではいけないと思います。歴史家というものは、先にも申しましたように過去に飛び込んでしまっただけではいけないわけです。いつも現在に眼を据えておかなければならないと思いますね。

そこで最後に、モダニズムの基本特性としてのソフィステイクーションを問題にしたいのですが、もともと初期の近代建築は、少くともたてまえだけは、「生一本」で行こうとしたといえますね。すなわち抑制的排除的なものです。本音はそうではなく何らかの表現性を求めようとしたのですが、その表現の自由度の拡張は、いずれ「生一本」の反対の混成的なもの、いい方をかえたら折衷主義的なものになります。「生一本」の状態というのは、もとより素朴なものです。だから、ソフィステイクートという言葉に対立するものはナイーブ・アンド・ソフィステイクーティッドという風に、対にして用いられることが多くみられます。そしてこうしたものに対立するものとして、リファインド・アンド・ソフィステイクーティッドといういい方があります。このことからわかるように、ソフィステイクーションは、決して洗練と同義ではないのですが、今日アメリカなどでは、そのようにとる場合が多いように思われます。それではおかしいと思うのです。

このようにして、ソフィステイクーティッドという言葉に当るものは、日本語にはちょっと見当らないのですが、これは微妙なニュアンスを含むもので、よく建築家の磯崎新さんなども、自分の作品の解説でしばしばこの言葉をつかっていますね。これはまさにモダニズムからポスト・モダニズムを通じての大切なキーワードだと思います。ともかくこの言葉には非常に洗練されたと解せられる面があると同時に、混ぜものをするとか、人づれするとかいう、ややマイナスの面も同時に含まれていると考えられます。一般に物事はそういうものなんですね。こちらがいいがこちらは悪いという、そういう同時に反対の両面をもつわけです。ここではそういう解釈が大切なので、そうでないとおかしいのです。

これはどういうことかと申しますと、さっきのやはり「生一本」の喩えのことなのですが、「生一本」に対立するものとして例のブレンドされたウイスキーなどというものがありますね。スコッチなんかの原酒に混ぜものをすることで、私も知らなかったのですが、ワインの専門家

の本を見ていたらワインもブレンドするようなので、ブレンドされたワインのことを一名ソフィステイクエティッド・ワインと呼ぶのだそうです。ところでこのブレンドする行為は英語ではアダルトレーション (Adulteration) と申しますが、アダルトというのは大人のことで、これは酒を素朴な状態から人あたりのいい大人にすることですね。「生一本」というのはあまりに純粋すぎて、かえって案外一般人の口には合わない場合があるわけで、都会人の口に合うように適当に調合して混ぜ合わせ、人為性を加えて造るのが、このソフィステイクエティッド・ワインなのです。これをワインの専門家たちは「偽和」と呼ぶそうですが、ちょうどそういう風に、近代建築も発展の上で、表現の自由度がだんだんと広がるにつれて非常に混成的で折衷的なものになって来ています。近頃ジェンクスなどはこうした折衷主義的傾向を盛んに讃え、これを以前の折衷主義と区別して、ラジカル・エクレクティシズムなどと呼んでおりますが、いずれにしても折衷主義的なものは、そういう意味で良い面と悪い面をいつも同時に持っているものです。ソフィステイクエーションには上のような不純化という悪い面とともに、その一方では洗練という良い面も持っています。一方、「生一本」のピューリズムの方は素朴で純粋な良い面をもつとともに、田舎的というか、もっさりしたという悪い面ももっています。それに対して折衷主義の方は非常にシャレっていて、都会的にイキで洗練されてはいるけれども、不純ですれっからしです。これはあのソフィステイクエティッド・ガールなどという言葉からもよく分るのですが、こうして近代建築は要するに、そのデザイン一般で、このソフィステイクエーションを基軸としてやって来たといえるわけです。だからこのキーワードを正しく知らないことにはお話にならないわけです。これをただ単純に「洗練」と同義に解したり、さらにはもっと誤った日本語訳をしている人もいますが、そのようないいかげんな訳語を用いるくらいなら、むしろそのままソフィステイクエティッドといった方がいいと思いますね。あるいはソフィステイクエイトなものと訳してもいいのではないかと思います。

ところでこれがなぜ大事かと申しますと、これの対概念は反アダルトレイトとして子供のものです。すなわち素朴でナイーブで正直でストレートなものですが、こちらは大人ですから額面通りに受けとってはいけないわけで、モダニズムとは一般に何よりもそうした「ふくみ」をもつものなのです。その一番いい例はル・コルビュジェですね。コルビュジェの建築が機能主義であるなんてことをよくいう人がいますが、彼の機能主義を文字通りに、正直にうけると大きなあやまりを犯すことになります。一概に機能主義と申しまして、これにはいろいろのふくみがありまして生一本な、文字通りの機能主義、いい方をかえたら、リテラリー・ファンクショナルリズム素朴機能主義ナイーブ・ファンクショナルリズムというのがあると同時に、もう一つ、これはピーター・ブレイクの言葉ですが、これとは別のふくみをもつ機能主義として、ソフィステイクエティッド・ファンクショナルリズムというものがあることをよく知っておく必要があると思います。コルビュジェの機能主義とはこの後者の場合に他なりません。だから文字通りの機能主義にばかり注目していたらだめなので、たてまえは機能主義だと言っておきながら、本音は機能など全く問題でないというのが、モダンからポスト

モダンにかけての発展の全過程を通じての一貫した特性なんですね、モダニズムの建築がはっきりそんな風にナイーブな状態にあったことなど、ほとんどなかったのではないのでしょうか。だから、そういう意味で、先にのべましたように、近頃でのモダニズムの告発にしたところでそれをただ単純に、もっぱら反ソフィスティケートなものとして「機能的で合理的」などと割切つて考えることは、やはり少々子供っぽい皮相的な見方ですね。もっとつっこんで歴史的によく調べてかからねばいけないと思いますね。

そこで後は結論というわけですが、もとより結論という程のものはありませんが、今日さし当っての課題は最近のポストモダニズムに関連の深いコンサヴェーションの問題です(図7参照)。コンサヴェーションは私の周辺でも、いろいろのカタチで建築家たちが関わっています。例えば兵庫県でやっている古い建物の保存問題ですね。でも保存ということも、やはりもう少し深く考えてもらった方がいいのではないかと思います。私は何でも潰せとって保存に全面的に反対しているわけではありません。昨年は大阪などでも盛んにやっていたけどね。大阪の砲兵工廠だった明治の建物の破壊の問題はこの間も問題になっていましたね。昨年(1981年)7月神戸で「近代建築文化財の保全・再生シンポジウム」が学会主催で行われました時、私はコメンテーターとして出席して、よけいなことを申しましたが、よけいなことを申しましたから新聞は何も書いてくれなかったですけれど……。 (笑い) 結局ね、保存はいいのですけれど、何でもかんでも近代建築を保存しなければいけないという考えはどうかと思います。それは、現代史の立場から前向きの姿勢で眺めた場合、おかしいと思うのです。

そうしたことから私は、あの席で林野全孝さんとちょっと議論になりましたが、結局あの時、私は「三つの突出」を提言したわけです。突出という言葉は現代の中国でよく使われますが、この頃では、日本でもそろそろ使っていますね、そこで私のいう「三つの突出事項」の一つは、まず建築の突出です。建築のことだけしか考えない、つまり木を見て森を見ないやり方です。私はこれを環境的思考との対立の上で建築的思考とよんでいるのですが、次に第二はこの考え方との兼合いで歴史ばかりしか考えない歴史の突出、これは林野さんたちのような様式史の人に多い傾向ですね。これは自分の研究テーマが失われて行くことにのみ気をとられた、いふなれば学者エゴ的な考え方から来るものと思われまます。そして第三の突出は文化です。文化の突出、文化財的な考え方が突出しているのです。あの兵庫県庁舎の南庁舎の保存の場合などはいいいのですが、つまり保存に値する理由があると思われまます、ただねえ、先に申しましたように、博物館的な礼拝的な考えにもとづくものは良くありません。ただ単に保存するだけでなく、十分活用・再生できないといけないと思うのです。それともう一つ環境的な配慮が必要です。もちろんあの南庁舎の場合はそれがちゃんとありましたがね。「突出」とは他のことを考えずに全体との関連性などを無視して、ただそのことだけを、コンテキストからはずして考えるものです。

歴史が大事だからなどというのは非常に利己主義ですよ。あるいは文化、いわゆる文化と

うものも、私はおかしいと思うのです。例えば文化鍋とか文化住宅とかね……。 (笑い) そうした考え方で文化を語る人が歴史屋さんのなかにもかなり多いようです。情けないですね。以前大阪の中之島の再開発計画でも、そういうことがありましたね。偉い文化人や先生方がよってたかって、中之島に芝居小屋群をつくることで大阪文化のカサ上げをしようとしたことがありましたが、文化施設をつくったら文化が高まるという考え方は妙だと思います。あの計画は潰れましたけれどね。これは文化をモノとして考えるもので、これはアメリカによくある考え方ですね。アメリカ人は文化をモノとして考えます。つまり文化と文明を一緒くたにして考えるわけですね。だから文化鍋も文化になるのです。そのほか文化講演会、文化教室などいろいろあるでしょう。そういうものとしての文化とちがって、“文化的な”というような形容詞一名詞とはちがう“文化的生活”、というような使い方で文化のことを考えるべきではないかと思えます。われわれはこれから、何よりも文化的な環境を造っていかなければなりません。そこで、例えば大阪市のように、あんな変な市役所をおっ建てるくらいなら、むしろ全部潰して公園緑地にでもした方がより文化的だということです。ああいう非文化的な突出したものの考え方ではなく、もっと環境的にコンテクスチュアルに考えていくべきだ……。とまあ、そういうことです。それが私のいう環境的思考というものです。だから「建築から環境へ」ということは要するに建築的思考から発想の転換をして環境的思考へということですね。これにつきまして私は、以前つまらない風景論の本の中でもそのことに触れておきましたが、まあ今日の講演も結論的にはそういうことになります。時間が参りましたのでこれぐらいにさせていただきます。御静聴ありがとうございました。(拍手)

---

\* 本稿は、昭和57年5月8日、神戸大学工学部大講義室で行われました約1時間半にわたる向井正也先生退官記念講演会の録音記録から文章に起し、向井先生に補筆していただいたものです。

向井正也先生記念集録

---

昭和58年9月発行

編集・発行

事務局

向井正也先生退官記念事業会

神戸大学工学部建築史研究室

〒657 神戸市灘区六甲台町

電話 (078)881-1212

---